

社会科教科書における後置詞について

佐藤尚子・小高 愛・白鳥智美・宮川和子・遠藤真由美

1. はじめに
2. 社会科教科書における出現数
 - 2-1. 後置詞の全出現数
 - 2-2. 後置詞をのぞいた動詞の数
3. 各後置詞の用法と社会科教科書における使用状況
 - 3-1. 「～によって」
 - 3-2. 「～について」
 - 3-3. 「～にたいして」
 - 3-4. 「～にとって」
 - 3-5. 「～にかけて」
 - 3-6. 「～にわたって」
 - 3-7. 「～を通じて」
 - 3-8. 「～をめぐって」
 - 3-9. 「～を通して」
 - 3-10. 「～をめざして、～にむけて」
 - 3-11. 「～において」
 - 3-12. 「～にむかって」
 - 3-13. 「～に関して」
 - 3-14. 「～として」

4. まとめ

【主要参考文献】

【用例出典】

【主な調査・執筆分担者】

1. はじめに

本研究は教育出版と東京書籍発行の小学校4～6年生の社会科教科書(平成7年2月15日文部省検定済)に使われている動詞派生の後置詞を抽出し、頻度とその用法について分析したものである。

白鳥・玉井によって社会科教科書の語彙調査が行われている(白鳥・玉井2000)が、その調査では、調査単位としてW単位を採用した。(W単位は国立国語研究所1986/1987『中学校教科書の語彙調査』の調査単位の1つであり、「専門用語や日本語の語構成などを調査するための長い単位」である。)

白鳥・玉井2000ではW単位を採用したため、「～(に)について」「～(に)対して」などが、助詞と動詞に区切られてしまっており、それぞれの動詞のところに入れられてしまっている問題点がある。(これは、W単位の問題点である。)しかし、「～(に)について」「～(に)対して」などは動詞とは異なる意味機能を有しており、それらは、名詞の格の形とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語「後置詞」として位置づけられる。(鈴木1972)

実際、社会科教科書を読んだ場合、「～(に)について」「～(に)対して」などは動詞「つく」「対する」の意味がわかったからといって、理解できるものではない。

以上のような点から、本研究では社会科教科書における後置詞をとりあげ、その分析をおこなった。

ところで、「後置詞」とは、どのようなものであろうか。ここでは、動詞派生の後置詞の代表的なものである「～(に)について」をみてみよう。「～(に)について」は動詞「就く」から派生したもので、その中止形をとっている。しかし、実際の例をみると、動詞としての／ある位置に身を置く／という語彙的な意味をうしなっており、また、単独で文の成分となれず常に名詞に従属して、その名詞と他の単語との関係をさしだしている。つまり、動詞としての文法的な意味もうしなっている。また、みとめ方、ていねいさ、アスペクトなどのカテゴリーをもたないという点で動詞としての形態論的な特徴もうしなっている。

社会科教科書にはこのような特徴をもつ後置詞として位置づけられる単語が15使われていた。詳細については「3. 各後置詞の用法と社会科教科書における使用状況」でのべるが、その順は「2-1. 後置詞の全出現数」でしめされた出現数の多い順である。また、後置詞にとりたての「は」がついた形が特殊な用法を持っている場合には、それ

もとりあげた。

また、社会科教科書の用例の出典については以下のように略して示した。

教育出版 4 年上	教育 4 上	または	教 4 上
4 年下	教育 4 下		教 4 下
5 年上	教育 5 上		教 5 上
5 年下	教育 5 下		教 5 下
6 年上	教育 6 上		教 6 上
6 年下	教育 6 下		教 6 下
東京書籍 4 年上	東京 4 上	または	東 4 上
4 年下	東京 4 下		東 4 下
5 年上	東京 5 上		東 5 上
5 年下	東京 5 下		東 5 下
6 年上	東京 6 上		東 6 上
6 年下	東京 6 下		東 6 下

2. 社会科教科書における出現数

2-1. 後置詞の全出現数

表1に教科書別、学年別の後置詞の全出現数を出現数の多い後置詞順に示した。ただし、「～（と）して」は出現数は多いが、格とは関係しないという点ではほかの後置詞とは少し性格を異としているので、最後に位置づけた。出現数において、「～（に）よって」が一番多い。また、小学校4年に比べ、5年、6年では出現数が大幅に増えている。これは、5、6年の社会科で取り上げられる内容が後置詞抜きに記述できないことをあらわしているといえよう。

2-2. 後置詞をのぞいた動詞の出現数

表2では白鳥・玉井2000に示された動詞の頻度数の中で、後置詞以外に使われているものと後置詞として使われているもののそれぞれの出現数を示したものである。これをみると、例えば、動詞「たいする」としてあげられている44例はすべて後置詞の用法である。このように、特定の動詞においてはすでに本来の動詞としてののはたらきより、後置詞としてののはたらきが多くを占めているものがあることがいえる。

表1 後置詞の全出現数

	教	東	教	東	教	東	教	東	教	東	教	東		
	4上	4上	4下	4下	5上	5上	5下	5下	6上	6上	6下	6下	計	計
～によって	2	3	3	3	17	9	10	14	24	17	5	5	112	172
～によっては					1	1	1	1		1			5	
～により					2	1	1			3		5	12	
～による			3	1	5	3	6	5	4	5	6	5	43	
～について	11	17	10	3	35	18	16	12	4	2	11	6	145	155
～については	1				1	1	1	1				1	6	
～についての	1								1		2		4	
～に対して	1		1		1	2			13	8		1	27	44
～に対し										4			4	
～に対する					1	1			3	4	2	2	13	
～にとって			2	2	6	2	2	2		3	1	1	21	21
～にかけて			1	2	1	1	1	1	1				8	13
～にかけては				3				1					4	
～にかけての					1								1	
～にわたって			1						3	3			7	10
～にわたる			1						1	1			3	
～をめぐって									2	2		2	6	10
～をめぐり										1			1	
～をめぐる					1				1		1		3	
～を通じて										1	1	5	7	9
～を通じての										1		1	2	
～を通して					4	1	2					1	8	8
～をめざして		2				2		1					5	5
～に向けて					1				1	1		1	4	4
～において					2						2		4	4
～に向かって	1			1	1	1							4	4
～に関する					1		1				1		3	3
～として	2	7	3	5	10	5	2	5	19	23	7	14	102	112
～としての							1	1	2	3	2	1	10	
合計	4年計 93				5年計 227				6年計 254				574	574

※「～によっては」「～については」「～にかけては」は、とりたての形で特別の用法をもっているため、見出し語としてとりあげた。

表2 後置詞をのぞいた動詞の出現数

	後置詞以外	後置詞	合計		
よる	2	172	174	※1	
つく(付・着・就・点)	77	155	232		
たいする(対)	0	44	44		
とる(取・採・撮)	44	21	65		
かける(掛)	33	13	46		
わたる(渡)	10	10	20		
めぐる(巡)	2	10	12		
つうじる(通)	1	9	10		
とおす(通)	0	8	8		
めざす(目指)	20	5	25		※2
むける(向)	9	4	13		
おく(置)	35	4	39		
むかう(向)	8	4	12		
かんする(関)	0	3	3		
する	1095	112	1207		

※1 報告書において、意味のちがいが不明。
よる(依) 107
よる(因・縁・由) 67

※2 報告書の使用度数
とおす(通) 7

3. 各後置詞の用法と社会科教科書における使用状況

3-1. 「～によって」

3-1-1. 「～によって」の用法

ニ格の名詞と後置詞「よって」のくみあわせ（以下「～によって」）の用法は次の5つがある。このうち、③の受動文の主体というのは、受動文という制約があり、また、④の異なりの条件をさしだすばあい、うしろにくる動詞がかぎられていて、他の3つに比べて異質である。さらに、④の対比＝とりたてのかたち「よっては」になると、独自の用法がある。

～によって	～による
①＜原因＞をさしだす ・地震によって多くの人が亡くなった。	・地震による死者
②＜手段＞をさしだす ・日々の努力によって前進する。	・努力による前進
③受動文において＜行為の主体＞をさしだす ・キリスト教はザビエルによって伝えられた。	・ザビエルによる布教
④＜異なりの条件＞をさしだす ・民族衣装は季節によって違います	・季節による違い
～によっでは	—
⑤一部になりたつことをあらわす ・曜日によっでは帰宅が深夜になります。	×

なお、「～によって」には、第二中止形のほかに、「～により」という第一中止形もちいられる。この「～により」は、上の「～によって」の用法のうち、④と⑤を除いた、①から③までの用法が共通している。

- ①地震により多くの人がなくなった。
- ②日々の努力により前進する。
- ③キリスト教はザビエルにより伝えられた。
- ④*民族衣装は季節により違います。
- ⑤*曜日によりは帰宅が深夜になります。

3-1-2. 社会科教科書における「～によって」

社会科教科書においても①から⑤までの用法がすべてあらわれる。数として多いのは②の用法であるが、これは社会科教科書にかぎったことではない。社会科教科書における「～によって」の使われ方を順に見ていきたい。

3-1-2-1. <原因>をさしだすばあい

「～によって」は、名詞部分に現象をあらわす名詞、または人の行為をあらわす名詞(句)がきて、うしろの動詞部分に現象をあらわす動詞がくると「～によって～」は原因—結果関係をさしだす。(小高1994)

- ・ 公害の広がりによって、全国で大きな公害がでてしまったことは(後略)(教育5上)
- ・ 酸性雨の影響によって森林がかれてしまった所があります。(教育5下)
- ・ また、人がふえることによって、ごみの量が多くなり、処理がむずかしくなります。(教育5下)

3-1-2-2. <手段>をさしだすばあい

「～によって」の名詞部分にも動詞部分にも人の行為をあらわす単語がくるばあい、述語の部分の動詞はある<目標>をあらわし、名詞部分にきている名詞(句)は、その目標達成のための<手段>をさしだしている。このとき、<手段>となるのは主体による意図的な行為であり、ここでは主体はあきらかに目標達成の意図のもとに、ある行為

をおこなっている。この意図性の有無が①の用法と②の用法を分けるよりどころである。
（小高1994）

- わたしたちは、貿易をめぐる国と国との対立も話し合いによって解決していくことが大切だと思いました。（教育5上）
- わたしたちは、水田をととのえることによって、今のような農業ができるようになったことを知りました。（教育5上）
- また、植える時期をずらすことによって、長い期間同じ作物を集荷することができます。（教育5上）

また、ある目標達成のための〈手段〉ではなく、次のように単なる〈媒介〉をあらわす用例もある。

- 衛星放送によって競技の様子が世界じゅうにおくられました。（教育6下）
- 前に学習した、天気予報の番組は、映像によって伝えられた情報でした。
（教育5下）
- 人や物は、鉄道や航空機によっても運ばれています。（教育5下）

さらに、社会科教科書には次のように省略的な文も多く見られる。

- わたしたちの身の回りには、たくさんの情報があふれています。しかもその情報はふえ続けています。その情報によって、わたしたちは考えたり、判断したりします。
（東京5下）
- 城下町に住む武士は、農民のおさめる年貢米によってくらしていました。
（東京6上）

これらの例文は、「情報を得ることによって」「農民のおさめる年貢米をつかうことによって」というように、本来は「～スルこと」という形で、手段としての行為を明確にあらわさずに省略的にしている文である。

3-1-2-3. <行為の主体>をあらわす

「～によって」が受動文にもちいられるばあい、つぎのように名詞部分に人をあらわす名詞がくると、その人名詞は動詞のさしだす<行為の主体>をあらわす。

- ・キリスト教は、スペインの宣教師ザビエルによって、1954年に日本に伝えられました。(教育6上)
- ・鉄砲は、長篠の戦いが起こる30年ほど前の1543年に、ポルトガル人によって種子島に(鹿児島県に) 伝えられました。(教育6上)
- ・国の政治は、国民が選挙で選んだ代表者(議員)によって進められています。
(東京6下)

3-1-2-4. <異なりの条件>をあらわす

「～によって」でさしだされるある条件がかわることによって、主語としてさしだされるものやことがらに違いがあることをあらわす。この用法は後ろの動詞部分にくるのは／ちがう、ことなる、変化する／という意味をあらわす単語にかぎられる。

- ・南北に細長い日本の国土では、ところによって地形や気候が大きくちがいます。
(東京4下)
- ・親工場の製品の売り上げによって、わたしたちの工場の注文もかわるので
(教育5上)
- ・曜日によって、男子の日と女子の日を分けることもあります。(東京6下)

また、次のように、うしろが文になるばあいもある。

- ・ピーマンを積みこむ時刻や運び先によって、カーフェリーを利用したり、高速道路で運んだりするのです。(東京5下)
- ・さけ、かれい、かに、たこなどをとっていますが、魚の種類や季節によって、いろいろなくふうをしなければなりません。(教育5上)
- ・火事のひろがりによって、いつ、どこの消防しょや消防出張所から、何台の消防自動車や救急車が出動するかということを、きちんと決めてあります。
(教育4上)

3-1-2-5.「～によっては」

「AによってはB」というくみあわせでは、後ろのBがあらわすことがらが、すべてのばあいに成り立つのではなく、Aでしめされる条件のうちある一部のものに成り立つことを述べる。すなわち、「ある一部のAではBのことがなりたつ」ことをあらわしている。

- ・安塚町では、地域の組織を生かして住民のちえを集め、活気のある町づくりを進めています。地域によっては、朝の5時30分からいっせいに花植え作業をしている所もあります。（教育5下）
- ・きのうの午後に、西都市を出発して宮崎自動車道、九州自動車道、中国自動車道を通じて午前3時ころに大阪市中央卸市場に着きました。積み込む時刻によってはカーフェリーを使うこともあります。（東京5下）
- ・農協では、野菜の集まりぐあいや、市場のねだんの動きによっては、低い温度をたもつ倉庫（予冷库）に入れておいて、新せんなじょうたいで野菜を出荷できるようにしています。（教育5上）
- ・工業は、わたしたちのくらしを、便利で豊かにしてきました。しかし、製品をつくるとちゅうで、またその使い方によっては、人々の生活や環境を悪くしていることがあります。（東京5上）

この用法で特徴的なことは、「～によっては」の「は」をとることはできないことである。例えば、上の最後の用例を「使い方によって、人々の生活や環境を悪くしていることがあります」といいかえると、「～によって～」は原因—結果関係をさしだすことになり、文の意味が変わってしまう。

「よって」という後置詞は①から④までの用法では、対比＝とりたての形「よっては」に、ほとんどならないようである。それに対して、⑤の用法は「よっては」という形にかぎられ、他の形ではあらわすことができない。

3-2.「～について」

3-2-1.「～について」の用法

ニ格の名詞と後置詞「について」のくみあわせ（以下「～について」）は、後ろにつづく述

語動詞のあらわす言語活動、思考活動、調査活動の〈テーマ〉をあらわす。「～について」の用法で注意が必要なのは、「～について」が主語のあとに文中で使用されるばあいと、主語に先立って文頭で使用されるばあいで、異なる用法をもっていることである。文中で使用されるばあいは、後につづく述語動詞にくるものは、①言語活動動詞、②思考活動動詞、③調査活動動詞にほとんど限られていて、を格の名詞と言い換え可能であるという点で対象性をもっているといえるだろう。このばあいは、述語動詞のしめす言語活動、思考活動、調査活動の〈テーマ〉をさしだしている。

いっぽう、主語に先立って文頭にさしだされるばあいは、述語動詞の制限がゆるくなり、言語活動、思考活動、調査活動をあらわす動詞以外のものとでもくみあわせる。このばあい、「～については」というかたちでもちいられる。

～について	～についての
言語活動、思考活動、調査活動の 〈テーマ〉をあらわす ・結婚について話す ・人生について考える ・自身について調査する	・結婚についての話 ・人生についての考え ・地震についての調査
～については	—
〈全体のテーマ〉をさしだす ・設備の廃棄については、 それにとまなう人員整理 の問題と資金手当てのめ どがまだたっていない。	×

3-2-2. 文頭にさしだされる「～については」の用法

「～について」という後置詞は、文中にもちいられるばあいと、「～については」というとりたての形で文頭にもちいられるばあいとで、用法がことなる。

まず、文中でもちいられる「～について」は、言語活動をあらわす動詞、思考活動をあらわす動詞、調査活動をあらわす動詞とくみあわせり、その言語活動、思考活動、調査活動のテーマをさしだす。

- ・かおるは徳沢小屋で彼女自身が口に出した結婚問題について言っているに違いなかった。（氷壁）
- ・わたしはこの一年間、（略）資本主義の「繁栄」についてもう一度考え直すようになった。（失業）
- ・服装、疲労度等全体について調査した上、（八甲田山死の彷徨）

述語動詞になる動詞例は次のとおりである。

【言語活動動詞】

いう、しゃべる、かたる、かたりあう、のべる、うたえる、はなす、はなしあう、口にだす、きく、質問する、たずねる、追求する、おしえる、指導する、書く、論じる、詳論する、説明する、報告する、協議する、検討する、相談する、批判する、抗議する、述懐する、

【思考活動動詞】

考える、思う、思い出す、考慮する、反省する、推定する、知る、理解する、把握する、解釈する、みとめる

【調査活動動詞】

しらべる、点検する、調査する、例証する、研究する、分析する

いっぽう、「～について」が、主語に先立って文頭にきていて、かつ「～については」というとりたての形でもちいられるばあい、文中でもちいられるばあいと異なる用法があらわれる。

まず、文頭にもちいられる「～については」のばあいは、述語にくる動詞の制限がゆるくなるという特徴がある。文中でもちいられるばあいには、これまでの例で見てきたように、言語活動動詞、思考活動動詞、調査活動動詞にほぼ限られているが、文頭の「～については」のばあいにはさまざまな動詞が述語の位置にくる。そして、特定の動詞にかかっているというよりは、後続する文全体にかかっているといえるだろう。すなわち、文頭の「～については」は、もはや述語のあらわす言語活動、思考活動、調査活動の＜テーマ＞をあらわすのではなく、これから述べる文の＜全体のテーマ＞をさしだしているといえる。

- ・同じように渡唐前の普照については、興福寺の僧であり、一に大安寺の僧だともいわれているという甚だ頼りない短い記述だけが残されている。(天平の薨)
- ・映画と連俳との比較については岩波版日本文学講座中の特殊項目「映画幻術」の中に述べてある私見を参照していただきたい。(寺田寅彦随筆集)
- ・製鋼設備の廃棄についてはそれに伴う人員整理の問題と資金手当てのメドがまだたっていない。(失業)

このような後続する文全体にかかって＜全体のテーマ＞をさしだしている「～については」は、ヲ格の名詞などの他の名詞の格形式でいいかえることもできないし、また、主語のうしろにもってくることもできない。次のようにいいかえることはできないだろう。

- * 同じように、興福寺の僧であり、一に大安寺の僧だともいわれているという甚だ頼りない短い記述だけが渡唐前の普照については残されている。
- * それに伴う人員整理の問題と資金手当てのメドが製鋼設備の廃棄については、まだたっていない。

3-2-3. 社会科教科書における「～について」

3-2-3-1. ＜テーマ＞をさしだす

社会科教科書における「～について」は、使用数もおおくさらにそのほとんどが下の用例のように調査活動動詞とくみあわさっている。このばあい「～について」はその調査活動の＜テーマ＞をさしだしている。

- ・わたしたちは県の土地の様子について調べたことを、振り返ってみました。
(教育4上)
- ・わたしたちは、資料を集めて、この建物について調べてみました。
(教育4下)
- ・みんなは、学校でつかわれている水について、調べていくことにしました。
(東京4上)

また、このばあい、「～について」を使用するばあいと、ヲ格の名詞を使用するばあいとで、次のように大きく意味が異なることがあるので注意を要する。

- ・わたしたちは、まず、袋井用水の水源地がある公園をくわしく調べることにしました。

（教育4下）

→ cf. 公園について調べる

- ・人々は川の流れをかえるだけでなく、大水からくらしを守るために水屋とよばれる家をたてました。どんなくふうがされているか、家のつくりを調べてみました。

（東京4下）

→ cf. 家のつくりについて調べる

「公園をしらべる」「家のつくりを調べる」というように、ヲ格の名詞でその対象をあらわすばあいには、その対象となる場所の中やものそのものを具体的、直接的に調べることをあらわすが、「公園について調べる」「家のつくりについて調べる」というばあいは、「公園」「家」というものや場所そのものを直接的に調べるのではなく、それらの何らかの側面を調べるのである。このように、前にくる名詞が具体的な場所やものをあらわすばあいには、「～を調べる」「～について調べる」というくみあわせの意味が異なってくるようである。

また、言語活動動詞、思考活動動詞とくみあわさる例もあり、その〈テーマ〉をさしだしているという点では変わらない。

- ・わたしたちは、自分たちのまちの四季のうつりかわりについて話し合ってみました。

（教育4下）

- ・工業のさかんな地域の特色について、地形や人口、交通などと結びつけて考えていきましょう。（東京5上）

社会科教科書において、「～について」とくみあわさる述語動詞は次のようなものがあった。

後ろに続く述語動詞（全134例中）

調べる（61）

話し合う（21）

話しをきく（7）

発表する(6)

考える(4)

知る(4)

きく(3)

たずねる(3)

学習する(3)

調べ(て)、発表する(3)

以後、1例ずつ

伝える、話し合いをする、話しをする、教えてもらう、注文がくる、
説明をうかがう、学ぶ、勉強する、調べて表にまとめる、
話す、相談する、考え合う、情報を得る、努力する、権限をもつ、
確かめる、発表しあう、意見を出し合う、批判する

「～について」は、社会科教科書の中での出現数は134例と他の後置詞に比べて多いが、うしろに続く述語動詞の異なり数は29と少ない。したがって、社会科教科書においては「～について」のうしろにつづく述語動詞はかなり限られているといえるのではないだろうか。

3-2-3-2. <全体のテーマ>をさしだす「～については」

3-2-2. で述べたように、「～について」が主語にさきだって、文頭にもちいられ、かつ「～については」というとりたての形をとっているばあい、<全体のテーマ>をさしだすという用法があった。

社会科教科書においても、このような用法がみられる。

- ・ ふえてしまったごみの処理については、量をへらし、再利用を進めるために、他の地域に先がけてリサイクル文化センターをつくりました。(教育5下)
- ・ たとえば、シートの布も、ぬう仕事については、この工場だけではまかないきれないので、専門の工場にたのんでいるのだそうです。(教育5上)
- ・ 例えば、たれもが、その能力に応じて等しく教育を受ける権利をもっていますが、一方では、小学校と中学校の教育については、すべての国民が、子どもたちにうけさせ

なければならない義務とされています。（教育6上）

3-3. 「～に対して」

3-3-1. 「～に対して」の用法

ニ格の名詞と後置詞「対して」のくみあわせ（以下「～に対して」）は、＜態度などを示す対象＞をさしだしている。（佐藤1989）

～に対して	～に対する
＜態度などを示す対象＞ ・政府に対して反対運動を起こす	・政府に対する反対運動

前述の表のほかに、連用形には第一中止形の「～に対し」の形が、また、連体形には「～に対しての」の形がある。社会科教科書では、「～に対して」、「～に対し」、「～に対する」が使われている。

また、次のように＜対比＞をあらわす場合があるが、これは文と文の関係をあらわす接続助詞に近いはたらきをしているため、今回は扱わない。

- ・ Aが100であるのに対して、Bは、50にも満たない。（作例）

小学校社会科教科書にも、次の2例が見られた。

- ・ 機械生産に対して、手すき和紙のように、道具を使って主に人手でつくることを手工業生産といいます。（教育5上）
- ・ 「将軍さまのおひざもと」といわれた江戸に対して、大阪は「天下の台所」といわれました。（東京6上）

3-3-2. 社会科教科書における「～に対して」

次の8例の名詞部分は、できごとやものごとをあらわしている。

- ・ 武士たちは、頼朝から受けたご恩に対して、命がけで奉公することをちかいました。（東京6上）

- 日本のこのような行動に対して、「朝鮮の独立をふみにじるものだ。」として、朝鮮の人々は全土で抵抗しました。(東京6上)
- しかし、このような政府の政策に対して、農民は不満をもち、各地で一揆を起こしました。(教育6上)
- このような日本の侵略に対し、中国の人々の抵抗はおとろえず、アメリカやイギリスが援助する中国政府の軍隊や、中国共産党が率いる人民の軍隊とともに、ねばり強く戦いました。(東京6上)
- 言葉や習慣、仕事に対する考え方などがちがう外国の人々といっしょに仕事をするのは、とまどうことが多くて、ずいぶん苦勞しました。(教育5上)
- 玄白たちがほんやくした解体新書が世に出ると、蘭学に対する関心はいっそう高まり、オランダ語の入門書や辞書もつくられました。(東京6上)

次の2例は、前の文を受けて、「これに対して、～」という形になっている。このような用例は全部で7例あった。

- こうして、日常生活では、結婚や就職、住む場所などで差別は残され、やがて、さらに強められていきました。これに対して、こののち、自らの力で差別をなくす活動を進めていきました。(東京6上)
- 一方、政府は、日米安全保障条約を改定して、アメリカとの軍事や経済の結びつきを深めようとしていました。これに対して、アメリカの戦いに日本がまきこまれてしまうとして反対する意見も強く、1960年には、全国各地で集会やデモが行われました。(教育6上)

次の5例は、名詞部分が人をあらわしていて、「～に対して」は態度を示す相手をさしだしている。

- また、山城国では(京都府では)、村々で戦いを続ける守護に対して、軍を山城から引き上げることを要求し、実現させました。(教育6上)
- 政府は、朝鮮人に対して、名前を日本式に変えることや、神社にお参りすることを強制しました。(教育6上)

- ・障害のある人に対する差別、職場や社会での女性に対する差別もあります。

（東京6下）

- ・このような差別は、農民や町人に自分よりも低い身分の人々がいると思わせて、武士に対する不満をそらす役割をしたと考えられています。（教育6上）
- ・また、アイヌの人たちや、在日韓国人・朝鮮人などに対する差別やへん見も解決していかなければなりません。（教育6下）

次の2例は、「～に対して」をニ格の名詞で言い換えることはできるが、言い換えた場合、間に入る句が長いため、修飾関係がわかりにくくなる。佐藤1989の〈関係の明確化〉の機能を果たしていると思われる。佐藤1989の〈表現性〉の機能を果たしているもの、すなわちニ格やヲ格に言い換えても意味が全く変わらない例は社会科教科書では見られなかった。

- ・1973年、裁判所は工場に対して、排水の処理をしなかったという理由で、患者や死亡した人の家族につぐないをし、その生活をほしょうすることを命じました。
（東京5上）
- ・土佐藩（高知県）出身の坂本竜馬は、たがいに対立していた長州藩と薩摩藩とに対し、新しい日本をつくるため協力するよう働きかけ、手を結ばせました。（東京6上）

3-4. 「～にとって」

3-4-1. 「～にとって」の用法

ニ格の名詞と後置詞「とって」のくみあわせ（以下「～にとって」）は、①〈基準〉と、②感情の持ち主である〈主体〉の2つの用法を持っている。（小高1999）

①〈基準〉は、属性形容詞や属性形容詞的な意味を持つ名詞などとくみあわさったとき、その属性・評価がだれの立場から見たものかをあらわす。下の例を見ると、「私たちを基準にして、私たちの立場や能力から考えると、その問題は難しい」ということになる。

②〈主体〉は、感情形容詞とくみあわさったとき、その感情をもつ〈主体〉をさしだす。下の例でいうと「うれしいと思う主体は作った人」である。

～にとって	～にとっての
①<基準> ・私たちに<u>とって</u>難しい問題だ。 ②感情の持ち主である<主体> ・作った人にと<u>って</u>うれしい。	・私たちに<u>とっての</u>難題 ・作った人にと<u>っての</u>うれしいこと

社会科教科書の中では、連用形のみが使われている。

3-4-2. 社会科教科書における「～にとって」

3-4-2-1. <基準>

「～にとって」が属性形容詞や属性形容詞的な意味を持つ名詞などにくみあわせると、「～にとって」は、その属性がだれの立場から見たものかという<基準>をさしだす。

社会科教科書で使われている「～にとって(は/も)」全21例のうち、19例が、この意味であった。また、そのうち、12例が、「大切」「必要」「かかすことができないもの」といった語句にくみあわさっている。マイナスの意味になるものは下の2例の「不利益となる」、「手ごわい相手」のみだった。

- ・浦安市は、生活公害をふせぎ、住む人たちにとってくらしやすい町づくりを早くから計画的に進めてきました。(東京5下)
- ・輪中にくらす人々にとって、大水へのそなえは、わすれてはならない大切なことです。(東京4下)
- ・一人一人が、何が自分にとって必要であるかを判断して、生かしていくことが大切なのです。(教育5下)
- ・これらの取り決めは、日本にとって、たいへん不利益となるものでした。(東京6上)
- ・全国統一をめざす信長にとって、甲斐の(山梨県の)武田氏は手ごわい相手でした。(東京6上)

「～にとって」は、小説などでは、名詞部分にほとんど人名詞や組織名しかこないが、小学校社会科教科書では、人以外の名詞があらわれた用例が、6例あった。名詞が擬人化されていると思われるような、やや不自然なものもある。

- ・冬のしめった空気は、おり物にとって大切なことです。（東京4下）
- ・自動車にとって安全であることは、とても大切なことです。（教育5上）
- ・つゆは、いねの成長にとって、なくてはならないめぐみの雨です。（教育4下）
- ・わたしたちは、このような資源が工場の生産にとってかかすことができないものであることに気がつきました。（教育5上）
- ・でも、ぎゃくに、漁業にとってよいこともあるのです。（教育4下）
- ・「伝統工業のように、昔から伝えられてきた技術は、わたしたちの暮らしにとっては、新しくすすんだ技術とともに必要なものなんだ。」（教育5上）

3-4-2. 感情のもちぬしである〈主体〉

「～にとって」が感情形容詞とくみあわせると、「～にとって」は、その感情をもつ〈主体〉をさしだす。小学校社会科教科書では、次の例のみであった。

- ・「使う人に、そのことをわかってもらえることが、つくる人たちにとってもうれしいことなので、さらにより製品をつくろうと技術をみがいているのね。」（教育5上）

3-5. 「～にかけて」

3-5-1. 「～にかけて」の用法

ニ格の名詞と後置詞「かけて」のくみあわせには、〈時間的・空間的範囲〉をあらわす用法と〈特筆すべき能力のあらわる対象〉をあらわす用法の2つがある。前者のほとんどは、カラ格の名詞＋ニ格の名詞と後置詞「かけて」のくみあわせ（以下「～から～にかけて」）という形をとり、後者の多くは、ニ格の名詞と後置詞「かけて」の対比＝とりたてのかたち「かけては」のくみあわせ（以下「～にかけては」）という形をとって用いられている。

～にかけて	～にかけての
①<範囲> a 時間的 ・金曜日から日曜日にかけて、小さな旅行をしてきた。 b 空間的 ・八王子インターから調布インターにかけて渋滞している。	・金曜日から日曜日にかけての旅行 ・八王子インターから調布インターにかけての渋滞
～にかけては	—
②<特筆すべき能力の現れる対象> ・山歩きにかけては自信がある。	×

<時間的・空間的範囲>をあらわす「～から～にかけて」は、「～から」で指し示された始点と、「～に」で指し示された終点で区切られた範囲内で、ある行為や状態が続く（繰り返される）場合に用いられるが、カラ格とニ格の名詞は、<時間的範囲>をあらわす場合には、時間的なある一点、<空間的範囲>の場合には、空間的なある一点をあらわすものがきている。

<時間的範囲>をあらわす場合、「金曜日から日曜日にかけて、小さな旅行をしてきた」を例にとると、名詞部分に、ある時（点）と異なる時（点）、すなわち「金曜日／日曜日」が示され、これら2つの異なる時にまたがって「旅行をする」という行為が続いたという形をとっている。

一方、<空間的範囲>をあらわす場合には、「八王子インターから調布インターにかけて、渋滞している」という例のように、名詞部分に、ある空間（点）と異なる空間（点）、すなわち「八王子インター／調布インター」が示され、これら2つの異なる空間にまたがって「渋滞」が続いているという形をとっている。

また、<特筆すべき能力のあらわれる対象>をあらわす「～にかけては」の場合は、「～にかけては」の前に、次の例「夏山を歩くこと」「用心深いこと」「学問」のような特筆すべき能力のあらわれる対象をあらわすニ格の名詞（名詞句）がきて、「～にかけては」の後に、その能力についての評価をあらわす述語がきている。その評価は、「誰にも負けない」「抜群である」「大学でも指折りの秀才である」というそれぞれの例の述語部分（ 部分）においてもそうであるように、プラス評価であることがほとんどである。

- ・加藤は彼が踏みこんだヒマラヤへの道がいかに遠いかを考えた。夏山を歩くことにかけては、誰にも負けない自信がついていた。（孤高の人）
- ・鴉というやつは、人間の廃物をあさって、人間の周辺をうろついているだけあって、用心深いことにかけては、とにかく抜群である。（砂の女）
- ・母には女の気持がわかっていて、そして息子の稚さが齒痒い気がした。学問にかけては大学でも指折りの秀才であるらしい。けれどもまだ女ごろの機微は解ってはいない。（青春の蹉跌）

3-5-2. 社会科教科書における「～にかけて」

社会科教科書においては、＜時間的・空間的範囲＞をあらわす用法のみが、あらわれる。そして、社会科教科書では、後置詞「かけて」が用いられている採集用例のすべてにおいて、名詞部分は「カラ格の名詞 + ニ格の名詞」の形をとっていた。

次の9例は、＜時間的範囲＞をあらわしているが、カラ格の名詞とニ格の名詞は、それぞれ「9月／10月」、「夕方／夜」、「夏／秋」「3世紀の後半／4世紀」などがあらわれている。最後の2例が会話文であることは注目される。

- ・4月に入ると、苗づくり、田おこし、5月初めまでの田植えと続き、9月から10月にかけていねかりとなります。（教育5上）
- ・6月から7月にかけては、毎日のように雨がふります。これを梅雨（バイウ）（つゆ）とよびます。（東京4下）
- ・良太くんたちは、春には山でわらびやぜんまいとりの手つだいをしたり、5月から6月にかけては、茶つみも手つだいます。（東京4下）
- ・また、観光客がいちごつみを楽しめるいちご園もさかんで、1月から5月にかけて、たくさんの観光客がおとずれます。（東京4下）
- ・また、夏から秋にかけてやってくる台風は、はげしい風や雨をもたらします。（教育4下）
- ・春から夏にかけては、広々とした平野で、じゃがいもやてんさいがつくられます。牧場では牛が多くかわれています。（東京4下）
- ・3世紀の後半から4世紀にかけて、近畿地方から瀬戸内海沿岸の各地に古墳がつくられ始めました。（教育6上）

- ・1963年(昭和38年)は、いつもの年の2倍も雪がふりました。1月から2月にかけて集中してふったので、鉄道や国道は1か月もとざされて、町は雪にうもれてしまいました。(東京4下)
- ・案内をしてくれた人が、「ターミナルがいそがしくなるのは、夕方から夜にかけてです。」と教えてくださいました。(教育5下)

次の3例は、＜空間的範囲＞をあらわしているが、カラ格の名詞とニ格の名詞は、それぞれ「秋田県／青森県」「関東地方の南部／九州地方の北部」「東日本／北日本」などがあらわれている。どの例も2つの異なる空間にまたがって「(～が) 広がる／広がっている」という形になっている。

- ・秋田県から青森県にかけて広がる白神山地は、日本でもっとも大きなぶなの林で、このあたり一帯の水がめの役めをはたしてきました。(東京5下)
- ・日本全体で工業のさかんな地域は、関東地方の南部から九州地方の北部にかけて、帯(ベルト)のように広がっています。(東京5上)
- ・東日本から北日本にかけては、ぶなに代表される広葉樹林帯が広がっています。(東京5下)

3-6. 「～にわたって」

3-6-1. 「～にわたって」の用法

ニ格の名詞と後置詞「わたって」のくみあわせ(以下「～にわたって」)は、3-5. で見てきた「～から～にかけて」と同じように＜時間的・空間的範囲＞をあらわす用法を持っている。

しかし、「～から～にかけて」の場合に、カラ格とニ格の名詞が時間・空間の点をあらわすものであったのとは異なり、「～にわたって」の場合、ニ格の名詞は、一定の幅のある時間(期間)・空間をあらわすものがきている。

～にわたって	～にわたる
<範囲> a 時間的 ・式典は六日間にわたりおこなわれた。 ・式典は六日間にわたっておこなわれた。 b 空間的 ・20キロにわたり渋滞している。 ・20キロにわたって渋滞している。	・六日間にわたる式典 ・六日間にわたっての式典 ・20キロにわたる渋滞 ・20キロにわたっての渋滞

*連体形に「～にわたる」「～にわたっての」の2形式あることは、森田・松木1989では指摘されている。

「～から～にかけて」の場合には、「～から」で指し示された始点と、「～に」で指し示された終点で区切られた特定の<時間的・空間的範囲>をあらわしていたが、「～にわたって」の場合には、「いつ」「どこ」と<時間的・空間的範囲>を特定するはたらきはなく、「六日間にわたって」あるいは、「20キロにわたって」のように、ある一定の時間・空間のひろがりの範囲を指し示し、後ろの動詞部分には、「おこなわれた」「渋滞している」のように、ある行為や状態が続く（繰り返される）ことをあらわすものがきている。

注）森田1977には、『『九月から来年秋までにわたって改良工事が施される』のような『……カラ……マデ』で期間を示す文例も見られる。』という記述があるが、社会科教科書でも、その他の採集用例でもこの形をとる例はあらわれなかった。

「～にわたって」を小説、及び論説文の採集用例で見ると、時間の広がり・幅をあらわす語としては、二格の数量名詞が、最も多く使われていた。

- ・学芸会の当日、鮎太は一時間にわたって、本も持たずに、英国の有名な新聞記者だという人の文章を、機関銃のように口から発射した。（あすなろ物語）
- ・加藤は石の入ったルックザックはそのままそこに置いて会社へ出かけていった。その日、十年間に渡ってつづけられた加藤の習慣の一つは、終止した。（孤高の人）
- ・また、高校生の留学については、昭和63年4月に高等学校における留学が制度化さ

れたことにより、3か月以上にわたって外国の高等学校で学習した留学生の数が増加しつつあり、平成2年度には、4,483人となっている。(我が国の文教施策)

- ・スイスの睡眠研究者イレーネ・トブラーは、夜行性で有名なゴキブリが昼間に休息しているとき、三時間にわたって、さわったり、つついたりしてやすむ邪魔をした。
(睡眠の不思議)

又、次の例のように「長年月」「長時間」「長期」「生涯」「終生」など、継続する時間が長いことをあらわす語がくる例も多く見られた。

- ・その名簿には、彼ら一人々々の技倆が、長年月にわたって記録、採点してあった。
(山本五十六)
- ・写真のフィルムの感光膜や、内服薬のカプセルなど、長期にわたって変化しないという性質を利用した用途もある。(化学とんち問答)
- ・みずみずしく清新な心、日々学ばんとする情熱、物事にたいする関心と感激、自己完成への孜々とした努力、このような若々しい精神を、孔子は終生にわたって持ちつづけた。(故事成語)

これらの例からもわかるように、「～にわたって」が、時間的範囲をあらわす場合には、何かの行為や状態の続く時間が長いことを示唆している。又、空間的範囲をあらわす場合には、それらの及ぶ範囲が広いことを示唆している。

又、「～にわたって」が＜時間的範囲＞をあらわす場合、「朝鮮からの使節は12回にわたって江戸をおとずれた。」のような使われ方をすることもある。ここでは、「12回にわたって」のように回数をあらわす名詞と「～にわたって」がくみあわさっている。この場合、ある行為（「(朝鮮からの使節が)江戸をおとずれる」という行為）の行われた回数が＜多回＞であることを示すことによって、その行為が、時間的に継続して行われたことが示唆されている。

「～にわたって」が＜空間的範囲＞をあらわす例は、社会科教科書にはあらわれなかった。次は、小説、及び論説文の用例である。

- ・たしかに、かなり広い範囲にわたって、性についての事柄は共通の話題になり得る。
伊木はくわしく、そのときの状況を説明した。(砂の上の植物群)

- ・高度成長は日本列島全域にわたって地域社会をずたずたに切り裂いた。
（稟議と根回し）
- ・このように、広範な業種にわたって非製造業が低迷し、通常のような景気下支え効果を発揮できなかったのは、次のような理由による。（経済白書）

3-6-2. 社会科教科書における「～にわたって」

社会科教科書では、「～にわたって」の＜時間的範囲＞をさしだす用法のみがあらわれた。

- ・この時、中国の首相は、「中国は、1894年以後50年にわたって、日本との戦争で大きな被害を受けたが、これからは、友好の歴史をつくろう。」と述べました。（教育6上）
- ・製糸工場や紡績工場で働く娘たちの中には、環境のよくないところで長時間にわたって働かされ、病気になったり、なくなったりした人も少なくありませんでした。
（東京6上）
- ・種まきの時期をずらすと、少ない人手でだいこんを育てることができ、長い期間にわたってしゅうかくすることもできます。（教育4下）

名詞部分に回数をあらわす語がくる場合があることは、すでにのべたが、社会科教科書においては、全体の用例数が少ない（7例）のではあるが、半数以上（4例）に回数をあらわす語がきている。

- ・13世紀に、中国を支配したモンゴル人は、国名を元と定め、2回にわたって北九州にせめてきました。（教育6上）
- ・一方、秀吉の侵略で中断していた朝鮮との国交は回復され、朝鮮からは400～500人の使節は12回にわたって江戸をおとずれました。（教育6上）
- ・鎌倉幕府が開かれてから80年余りたったとき、大陸から元の大軍が2度にわたって北九州にせめてきました（元寇）。（東京6上）
- ・やがて、秀吉の野心は、海外に向けられるようになり、中国を（明を）征服しようとして、2度にわたって朝鮮に大軍でせめこみました。（東京6上）

3-7. 「～を通じて」

3-7-1. 「～を通じて」の用法

ヲ格の名詞と後置詞「通じて」のくみあわせ(以下「～を通じて」)は、①<媒介>②<時間的範囲>の2つの用法を持っている。

①<媒介>は、うしろに組み合わさる行為などを成立させるために、名詞部分が何らかのはたらきをする仲介役または手段となる。

②<時間的範囲>は、名詞部分は一定の幅のある時間(期間)をあらわす名詞がきて、その期間中ずっと続くという意味になる。

～を通じて	～を通じての
①<媒介> ・友達を通じて知り合った。	・友達を通じての知り合い
②<時間的範囲> ・年間を通じて出荷される。	・年間を通じての出荷

社会科教科書には、第1中止形「～を通じ」の用例はなかった。

3-7-2. 社会科教科書における「～を通じて」

3-7-2-1. <媒介>をさしだす

- ・わたしたちは、毎日、テレビや新聞などを通じて、日本の様子、世界の様子について、さまざまな情報を得ています。(東京6下)

次の4例は、名詞部分が人、または団体をあらわす名詞で、それが、仲介役を果たしている。

- ・町民は、町民の代表である議員を選挙で選び、議会を通じて自分たちの願いを政治に反映させます。(東京6下)
- ・歴史で学習してきたように、日本は、中国や朝鮮を通じて、米づくりの技術や漢字、仏教などの文化を取り入れてきました。(東京6下)
- ・日本は、国連を通じてそのための役わりを果たしてきました。(東京6下)
- ・こうして、交わることのできる国々は、朝鮮通信使を通じての朝鮮と、長崎貿易によ

るオランダ・中国とに限られ、しかも幕府が許可した商人以外は、貿易できなくなりました。（東京6上）

次の2例は、名詞部分ができごとをあらわしていて、「～を通じて」は手段をさしだしている。

- ・わたしたちの生活は、世界の国々との交際を通じて成り立っています。（東京6下）
- ・相撲やサッカーなどのスポーツや歌舞伎などの文化を通じての交流が広く行われています。（東京6下）

3-7-2-2. ＜時間的範囲＞をさしだす

名詞部分には一定の幅のある時間（期間）をあらわす名詞がくる。「その間ずっと」という意味である。

- ・朝鮮通信使は、朝鮮や中国の文化をもたらし、また、日本は、日本の文化を伝えるなど、江戸時代を通じて両国の交流をはかりました。（東京6上）
- ・タイでは、1年を通じて気温が高く、雨が多い気候を利用して、古くから稲作がさかんです。（教育6下）

3-8. 「～をめぐる」

3-8-1. 「～をめぐる」の用法

ヲ格の名詞と後置詞「めぐる」のくみあわせ（以下、「～をめぐる」）の用法には以下のようなものがある。

～をめぐる	～をめぐる
＜争点＞をさしだす ・オリンピック代表をめぐる、熾烈な争いをした。	・オリンピック代表をめぐる争い

連用形には「～をめぐり」、連体形には「～をめぐるの」の形もある。

「～をめぐる」では、述語であらわされることがらの対象となることをさしだして

いる。この場合の述語には、「争う・対立する・口論する・トラブルが起こる・相違が生じる・摩擦がおきる・議論を呼ぶ」など／争う・対立する／という語彙的な意味をもつタイプの動詞がきて、「～をめぐる」は＜争いの対象となっていること＝争点＞をさしだしているといえる。

3-8-2. 社会科教科書における「～をめぐる」

社会科教科書には、次のような例があった。

- ・国会を開設し、憲法を制定して近代国家として歩み始めた日本は、朝鮮をめぐる中国と対立するようになりました。(東京6上)
- ・続いて1904年には、ロシアとの間に、中国東北部(満州)や朝鮮をめぐる日露戦争をおこしました。(東京6上)
- ・朝食の前に草を刈ることが多く、草刈り場をめぐる争いが起きることもありました。(教育6上)
- ・国の中では、民族の独立をめぐるひさんな争いがくり返されてもいます。(東京6下)
- ・アメリカと旧ソ連などが持っていた核兵器は、ソ連が多くの国々に分かれたこともあって、核兵器を持つ国々が増え、そのあつかい方をめぐる大きな問題となっています。(東京6下)

3-9. 「～を通して」

3-9-1. 「～を通して」の用法

ヲ格の名詞と後置詞「を通して」のくみあわせ(以下「～を通して」)は、①＜介在物＞②＜媒介＞③＜時間的範囲＞の3つの用法を持っている。

①＜介在物＞は、名詞部分がもの名詞で、あるものがある場所までやってくる際に、通過する具体的な物・場所をさしだしている。下の例では、ある場所に光がさしこんでくる際、「木の枝」を通ってくる。このとき、「木の枝」は、「光がさしこむ」という動作の成立のためにはたらくわけではない。

一方、②＜媒介＞では、うしろに組み合わさる行為などを成立させるために、名詞部分が何らかのはたらきをする仲介役または手段・原因となる。下の例では、「ある事件」

が、「知り合う」原因となっている。

③＜時間的範囲＞は、名詞部分は一定の幅のある時間（期間）をあらわす名詞がきて、その期間中ずっと続くという意味になる。

～を通して	～を通しての
①＜介在物＞ ・木の枝を通して光がさしこむ。	・木の枝を通しての光
②＜媒介＞ ・ある事件を通して知り合う。	・ある事件を通しての知り合い
③＜時間的範囲＞ ・年間を通して出荷される。	・年間を通しての出荷

3-9-2. 社会科教科書における「～を通して」

3-9-2-1. ＜介在物＞をさしだす

名詞部分にも名詞がきて、「～を通して」が＜介在物＞をあらわす場合には、あるものがある場所までやってくる際に通過する具体的な物・場所をさしだしている。

- ・さらに、人工衛星を通して、世界の様子を家の中にいても知ることができるようになりました。（教育5上）
- ・ここでは、さらに、テレビの画面を通して見ていた番組が、どのようにしてつくられ、放送されているのかを知るために、東京にある放送局をたずねて調べることにしました。（教育5下）

3-9-2-2. ＜媒介＞をさしだす

名詞部分には、行為をあらわす名詞、または「テレビ」「新聞」などの媒体をあらわす名詞がくる。この場合、「～を通して」は手段や原因をさしだしている。

- ・いろいろな工業は、すすんだ技術で開発した新しい製品を、テレビや新聞を通して毎日のように宣伝しています。（教育5上）
- ・また、昔から受けついだ技術にくふうを加えて、今の時代に合った新しい製品を研究している人もいます。このようなことを通して、あとを受けつぐ人の問題の解決をは

かろうとしています。(教育5上)

- ・ 憲法の三つの柱を中心とした政治の学習をとおして、憲法がわたしたちのくらしと深く結びついていることがわかりました。(東京6下)

3-9-2-3. <時間的範囲>をさしだす

名詞部分には一定の幅のある時間(期間)をあらわす名詞がくる。次の3例は、1年間ずっとという意味で、「～を通じて」と言い換え可能である。

- ・ 1年を通して紙すきをしています但冬はすく紙にねばりが出て一番質がいいものになります。(教育5上)
- ・ 1年をとおして仕事をするあいだは、いつも自分の子どもを育てるような気持ちで稲を世話します。(東京5上)
- ・ さらに、町が中心になって、スキー場をはじめとして1年を通して利用できる施設をつくったり、温泉を開発したりしました。(教育5下)

3-10. 「～をめざして」「～にむけて」

3-10-1. 「～をめざして」「～にむけて」の用法

ニ格の名詞と後置詞「むけて」とのくみあわせ(以下「～にむけて」)、ヲ格の名詞と後置詞「めざして」とのくみあわせ(以下「～をめざして」)は、前にくる名詞のタイプによって、意味・用法がはっきり異なっている。

「～をめざして」「～にむけて」は名詞部分に「町をめざして進んだ」「学校にむけて出発した」というように、場所名詞がくるばあいには移動の<方向>をあらわす。さらに、「すみよい町をめざして」「いじめのない学校をめざして」のように、形容詞などで修飾されている名詞のばあい、また「全国統一をめざして」のような行為をあらわす動詞をかざるばあいには、述語動詞である動詞のあらわす行為の<目標>をあらわすようになる。この用法も行為の向けられる広い意味での方向性なのであるが、同じく、<方向>をあらわす後置詞「むかって」には、このような抽象的な意味=用法はなく、つねに具体的な動作の具体的な<方向>をあらわすにかぎられていた。したがって、「むかって」の用法と区別するために、ここでは<目標>という用語をくわえている。

～をめざして、～にむけて	～をめざす、～にむけての
①移動の＜方向＞をさしだす。 ・頂上をめざして進んだ。 ・岸に向けて漕ぎ出した。 ②＜目標＞をさしだす。 ・住みよい町をめざして努力する。 ・公害ゼロに向けて努力している。	・頂上をめざす行進 ・岸にむけての出発 ・住みよい町をめざす努力 ・公害ゼロにむけての努力

3-10-2. 社会科教科書における「～をめざして」「～にむけて」

3-10-2-1. 移動の＜方向＞をさしだす

「～をめざして」「～にむけて」は、名詞部分に場所名詞がくるばあいには、うしろの述語動詞のあらわす移動の＜方向＞をあらわす。

- ・加賀国（石川県）の大名の前田氏が、江戸を目ざして、2000人もの行列を組んできました。（教育6上）
- ・また、大阪で荷物を積んだ船が、各地に向けて出発して行きます。（教育6上）

3-10-2-2. ＜目標＞をさしだす

「～をめざして」「～にむけて」が＜目標＞をさしだしているのは次のような用例である。「～をめざして」「～にむけて」が移動の＜方向＞をあらわしているばあいには、「～にむかって」といいかえることができるが、＜目標＞をさしだしている下のような用例は「～にむかって」とはいいいかえることができない。

- ・三島町では、住みよい町づくりをめざして、さまざまな運動に取り組んできました。（東京4上）
- ・農家の人々は、安全でおいしい米づくりを目ざし、ほこりをもって取り組んでいます。（教育5上）
- ・27才のとき、駿河の（静岡県の）大きな大名で、全国統一に向けて大軍を率いて京都に上ろうとしていた今川義元を桶狭間の（愛知県の）戦いで破り、（東京6上）
たとえば、上の最後の用例「全国統一に向けて大軍を率いて」というように、名詞部

分に行為をあらわす名詞がくるばあいには＜目標＞をさしだすが、「京都に向けて大軍を率いて」のように場所をあらわす名詞がくるばあいには、たんに移動の＜方向＞をあらわすようになるだろう。

3-11. 「～において」

3-11-1. 「～において」の用法

ニ格と後置詞「において」のくみあわせ（以下、「～において」）の用法には以下のようなものがある。

～において	～における
①＜空間＞をさしだす ・地球温暖化について、大阪において話し合いがおこなわれた。	・大阪における話し合い
②＜時間＞をさしだす ・明治初期において、多くの思想が生まれた。	・明治初期における多くの思想
③＜背景や範囲＞をさしだす ・実践において、私の考えを示した。	・実践における私の考え

3-11-1-1. ＜空間＞をさしだす

「～において」は、場所をあらわす名詞と組み合わせさせて、主語と述語であらわされることがらが成立する空間をさしだす。この場合の「～において」はデ格で言い換えることができる。

- ・ソヴィエトとの不可侵条約というのは、この頃から膳立てがすすめられていて、翌昭和十六年の四月にモスコーにおいて松岡外相の手で調印された日ソ中立条約のことで、大戦の末期ソ聯はこれを破って参戦したのであった。（山本五十六）
- ・葬儀は三月二日、旭川の教会においてとり行われた。会衆は会堂の外にまで溢れ、その中には信夫を慕って泣く日曜学校の生徒の可憐な姿もあった。（塩狩峠）

3-11-1-2. <時間>をさしだす

「～において」は時間をあらわす名詞を組み合わさって、主語と述語であらわされることから成立する時間をさしだす。この場合の「～において」は二格で言い換えることができる。

- ・それは私が過去の様々な時において、様々な愛した女達に似ていた。踊子のように、葉を差し上げた若い椰子は、私の愛を容れずに去った少女であった。（野火）
- ・もしそういう根本的なものがあつたならば、それはもっと早期に——彼が登山をはじめた初期において、大きな壁となつて、彼の前に立ちはだかつたはずであつた。単独行は淋しいものである。（孤高の人）

3-11-1-3. <背景や範囲>をさしだす

「～において」は、二格の名詞の部分に、具体的な場所名詞や時間名詞以外のものがある。このため、空間的・時間的な意味合いが弱まっていて、主語と述語であらわされることから成立する社会的な背景やことから成立する範囲を示すようになる。<背景や範囲>をさしだす「～において」は、多くの場合、デ格や二格に言い換えることができない。

- ・日本社会において、闘争の關係に本当にたつてゐるのは、資本家あるいは経営者と労働者ではなく、A社とB社である。（タテ社会の人間關係）
- ・そう書いた人が山岳界において、かなりの位置にいる者であつたから、そのことは眞実として伝えられた。（孤高の人）
- ・第1に、農家や自営業者の家庭において、家族は生産の単位であり、子供はまず、労働力としての意味を有してゐた。（平成4年国民生活白書）
- ・こうした枠内において、往々にして、外から「見えない」組織として、底辺のない三角關係が複雑な形をもちながら存在しているのがつねである。（タテ社会の人間關係）

3-11-2. 社会科教科書における「～において」

社会科教科書には、<背景や範囲>をさしだす用法しかなかった。採集された例は、次の4例である。

- ・わたしたちは、かぎられた海において、漁業をしていくことは、とてもたいへんなことなのだと思います。(教育5上)
- ・軍縮に向かいつつある現在の世界においても、核兵器や核廃棄物の問題は続いています。(教育6下)
- ・そして、満州事変や日中戦争において、日本は中国を侵略し、大量の物資と多くの人々の生命・財産をうばったのです。(教育6下)
- ・現在、日本は、工業生産においては、世界でも有数の国であるといえます。(教育5上)

最初の例の「～において」は漁業をしていく場所をさしだして、次の例は、問題が続いている社会的な背景をさしだしている。3番目の例は、「中国を侵略し、大量の物資と多くの人々の生命・財産をうばった」ということがらが成立する社会的な背景をさしだしている。最後の例は、「世界でも有数の国である」ということがらが成立する範囲をさしだしている。

＜背景や範囲＞をさしだす用法では、多くの場合、格では示せないで、社会科教科書でも「～において」が使用されている。

3-12. 「～にむかって」

3-12-1. 「～にむかって」の用法

ニ格の名詞と後置詞「むかって」のくみあわせ（以下「～にむかって」）の用法は＜方向＞をあらわすことである。そのあらわす＜方向＞は次のように、移動の＜方向＞、言語活動が具体的に向けられる＜方向＞、動作の向けられる＜方向＞、空間的な配置の＜方向＞、といずれも具体的な動作、配置の具体的な＜方向＞をあらわす。(小高2000)

～にむかって	
＜方向＞	
a. 移動の＜方向＞をさしだす	・頂上にむかって進んだ。
b. 言語活動が向けられる＜方向＞をさしだす	・太郎にむかってさかんにはなした。
c. たちふるまいの＜方向＞をさしだす	・カメラにむかって手をふった。
d. 空間的な配置の＜方向＞をさしだす。	・ポプラ並木が川下にむかってつづいている。

なお、連体形としては「～にむかう」という形があるが、この形式は「沖に向かう船」というように移動動作をあらわすばあいにもちいられ、「太郎にむかう会話」「カメラにむかう笑み」というように、動作の＜方向＞をあらわすばあいにはもちいられない。したがって、後置詞「むかって」の連体形として位置づけることはむずかしいのではないかとと思われる。

3-12-2. 社会科教科書における「～にむかって」

社会科教科書に出てくる「～にむかって」の用法は、c. のたちふるまいの＜方向＞をあらわすばあいと、d. 空間的な配置の＜方向＞をあらわすばあいである。はじめの1例はたちふるまいの＜方向＞をあらわし、次の3例は空間的な配置の＜方向＞をあらわしている。

- ・そのうち、100人あまりは女の人で、ミシンに向かって仕事をしています。
（教育5上）
- ・わたしたちの市は、三つの広い平らな土地が、相模川に向かって「だん」のように下がっていることがわかります。（教育4上）
- ・中央部から東に向かって奥羽山脈、西に向かって中国山脈などがのびて、日本列島を形作っています。（東京4下）
- ・上の地図は、豊田市から東に向かって、東海道本線ぞいの都市の工業生産のようすをあらわしています。（東京5上）

3-13. 「～に関して」

3-13-1. 「～に関して」の用法

ニ格と後置詞「に関して」のくみあわせ（以下、「～に関して」）の用法には①②のように主語のあとにきて文中で使用されるものと③のように主語に先立って文頭で使用されるものがある。文頭で使用される場合はとりたての「は」をともなった「～に関しては」のかたちをとる。「～に関して」と「～について」の用法はかなり近い関係にあり、また、②と「～に対して」の用法もかなり近い関係にある。

後置詞「に関して」は／関係がある、かかわる／という意味をあらわす動詞『関する』から出ているわけだが、後置詞「に関して」はその語源の意味を色濃く残しており、「関

係あることがら」というニュアンスを強くもっている。

また、文体的な面では硬い文体や論理的な文にしやすい。

連用形においては「～に関して」とともに第一中止形の「～に関し」の形が、連体形においては「～に関しての」と「～に関する」の両方が使われる。

～に関して	～に関し
①<テーマ>をさしだす ・論文の作成に関して説明する。	・論文の作成に関し説明する。
②<対象>をさしだす ・その国に関して特別なイメージを持つ。	・その国に関し特別なイメージを持つ。
～に関しては	—
③<全体のテーマ>をさしだす ・投資に関しては日本の影が薄くなっている。	×

～に関しての	～に関する
①<テーマ>をさしだす ・論文の作成に関しての説明	・論文の作成に関する説明
②<対象>をさしだす ・その国に関してのイメージ	・その国に関するイメージ

3-13-2. 社会科教科書における「～に関して」

社会科教科書では、連体形「～に関する」のみが使われている。

「～に関する」の前にくる名詞には制限はない。

「～に関する」の後ろにくる名詞には以下のようなものが多い。

1) 言語活動をあらわす名詞

本、記事、話、説明、相談、報告、意見など

2) 思考活動などをあらわす名詞

知識、問題、調査、考え方など

3) 感情、感覚をあらわす名詞

不安、予感、感慨、恐怖など

4) 視覚的なものをあらわす名詞

絵、イメージ、グラフ、

1)～4)の名詞は「～に関する」の①<テーマ>をさしだす②<対象>をさしだすという用法にそうものであるが、5)のような名詞がくることが多く、かなり慣用的な表現となっているようである。

5) 決まりや司法に関係がある名詞

法律、条文、規定、規則、裁判、罪、事件など

また、次の例のように文献や会議のタイトルによく使われる。

- ・『精神と情熱に関する八十一章』（雪国）
- ・『精神錯乱に関する医学的哲学的概説』（楡家の人々）
- ・「岸辺令子さんに関する調査報告」（花降る午後）
- ・連立与党の「総合的少子化対策の推進に関する提言」（朝日2000/6/15朝刊）
- ・文部省の「学生生活の充実に関する調査研究会」（朝日2000/6/15朝刊）

社会科教科書に「～に関する」の例が見られるのは以下の3例である。

- ・また、県や市でも川崎市と同じように、それぞれの地域の公害をふせぐために、きまりをつくって工場に守らせたり、公害に関するうったえを聞く係をもうけたりして、公害の発生をふせいでいます。（教育5上）
- ・地球サミットを開いたり、ラムサール条約などの環境に関する条約を結ぶのは、協力のあらわれの一つです。（教育5下）
- ・1992（平成4）年には、「環境と開発に関する国際会議（地球サミット）」がブラジルで開催されました。（教育6下）

最初の例は1) 言語活動をあらわす名詞、次の例は5) 決まりや司法に関係がある名詞、最後の例はタイトルをあらわす用法にあたる。

3-14. 「～として」

3-14-1. 「～として」の用法

ト格の名詞と後置詞「して」のくみあわせ（以下「～として」）の用法は①<資格、

立場、名目＞をあらわすことである。

また、とりたて「は」をともなったかたち「としては」には、②＜主題の提示＞と③＜「あるべきすがた」に反する内容を述べる＞*という独自の用法がある。

～として	～としての
①＜資格、立場、名目＞をさしだす ・家康は人質として織田氏に預けられた。	・人質としての家康
～としては	—
②＜主題の提示＞ ・私としては仕事を辞めるしかなかった。	×
③＜「あるべきすがた」に反する内容を述べる用法＞ ・父は日本人としては背が高い。	×

*②③は村田1997による。

社会科教科書では、①の用法だけが見られる。

3-14-2. 社会科教科書における「～として」の用法

「～として」は、前にくる名詞および後ろにくる述部の品詞については制限がない。

「～として」の部分は主語やヲ格の名詞について説明を加えており、「～として」の部分を除いても文は成立する。

3-14-2-1. 「～として」

「名詞＋として」の形で、述部にあらわされることがらに対し、主語がどのような資格、立場、名目でそれにかかわっているかをあらわしている。

- ・千葉県富里町は、すいかの産地として有名です。（東京4下）
- ・わたしたちは、戦争中、日本軍の病院で、看護婦として働いていた、大野君のおばさんのお話を聞くことができました。（東京6上）
- ・もちろん、母と会いたいし、自分が何者なのか知りたいと思いますし、日本人として日本に帰りたいとも思います。（東京6下）
- ・三河の（愛知県の）小さな大名の家に生まれた家康は、5才から18才までの間、人

質として今川氏や織田氏に預けられ、苦勞して育ちました。（教育6上）

次の3例のように、その文の中で示されていることがらが、どのような資格、立場、名目をもっているかをあらわしているものもある。

- このしせつは1986年（昭和61年）に、三島町が進めている町づくりの一つとして、つくられました。（東京4上）
- 政府は、近代化の一つとして鹿鳴館という様式の建物をつくり、舞踏会を開いたりしました。（東京6上）
- サウジアラビアは、国の方針として、教育にたいへん力を入れています。（東京6下）

3-14-2-2.「～として～を～」または「～を～として～」の場合

「名詞＋として＋名詞＋を＋動詞」または「名詞＋を＋名詞＋として＋動詞」の語順の場合、ヲ格の名詞であらわされるものの資格、立場、名目などを「～として」であらわす。「名詞＋として＋名詞＋を＋動詞」の語順の場合は、この用法があてはまるが、「名詞＋を＋名詞＋として＋動詞」の語順の場合は次の2つのタイプがある。

- (1) 多くの農民は、たて穴式の住まいでくらし、国司の命令を受けて、稲や地方の産物を税として国におさめていました。（東京6上）
- (2) 自動車をつくる工業では、鉄を主な材料として車体などをつくっていました。（東京5上）

(1) は稲や地方の産物をどのような名目で国に納めているかをあらわしており、「税として」の部分省略しても文は成立する。それに対して、(2) は「～を～とする」の文であり、後置詞ではない。

「名詞＋として＋名詞＋を＋動詞」の語順の例

- 上士幌町では、冬のもよおしとして、1982年から熱気球の大会を開いています。（東京4下）
- 農民は、税として収穫の半分ほどの年貢米をおさめたほか、さまざまな税を課せられました。（東京6上）
- 国民は選挙で投票することにより自分たちの代表として議員を選びます。（東京6下）

「名詞＋を＋名詞＋として＋動詞」の語順の例

- ・ ふった雨を地下水として、地中にたくわえて、少しずつ川に流していく働きがあるからです。(東京5下)
- ・ 日本は、満州を占領すると、翌年、その地域を満州国として中国から切りはなし、実権をにぎりしました。(東京6上)
- ・ 太子は、小野妹子たちを遣随使として中国に送り、中国の政治や文化を学ばせました。(教育6上)

3-14-2-3. 連体形「～としての」の場合

「名詞1＋としての＋名詞2」のかたちで、名詞2の資格、立場、名目などを名詞1であらわす。連体形の場合、「名詞1＋としての」の部分を略しても文は成立するが、省略すると、最初の例のように後続の名詞2の内容がはっきりしなくなる場合がある。

- ・ 地震でふとうが使えなくなると、東アジアの貿易の基地としてのはたらきにえいきょうができました。(東京5下)
- ・ 地頭は、私有地などに置かれ、その地域の人々を指図して税としての年貢を取りたて、領主のもとに送りました。(東京6上)
- ・ また、学校では日本語で学ばなければならず、民族としてのほこりをきずつけられました。(東京6上)

4. まとめ

1. 今回調査した後置詞の用法は以下の(1)から(10)までのグループに分けることができる。このようなグループに分けてみると、後置詞は用法別のグループごとに前の名詞部分と述語の動詞部分にくる単語のタイプがきまっていることがわかる。それぞれのグループの特徴についてまとめた。

- (1) <時間・空間>をさしだす 「～にかけて」「～にわたって」「～を通じて」「～を通して」「～において」

このグループの後置詞はニ格、またはヲ格の名詞部分に具体的な時間・空間をあらわす名詞がくる。「～にかけて」の名詞部分は具体的な時間・空間をあらわす名詞に

かぎられている。「～にわたって」「～を通じて」「～を通して」は名詞部分に一定の幅のある時間（期間）・空間名詞がきて述語部分ではその間に継続する動作・状態がさしだされる。このグループの後置詞のうち「～において」のみは具体的な時間・空間名詞以外にも「日常生活のさまざまな場において」のように、抽象的な名詞ともくみあわさることがある。

(2) ＜方向＞をさしだす「～にむかって」「～にむけて」「～をめざして」

具体的な動作・配置の具体的な方向をさしだすグループで、ニ格、またはヲ格の名詞部分には具体的な空間をあらわす名詞、または東西南北などの方角をあらわす名詞にかぎられる。

(3) ＜目標＞をさしだす「～にむけて」「～をめざして」

「～にむけて」「～をめざして」が＜目標＞をさしだすばあいには、名詞部分に「うつくしい町をめざして」というように形容詞でかざられた名詞、または行為をあらわす名詞がくる。「～にむかって」にはこの用法はない。

(4) ＜テーマ＞をさしだす「～について」「～にかんして」

このグループの後置詞は名詞部分には具体名詞から抽象的な名詞までさまざまな名詞がくる。うしろの述語動詞の部分には言語活動、思考活動、調査活動をあらわす動詞にほとんどかぎられている。

(5) ＜争点＞をさしだす「～をめぐる」

述語にくる動詞が「争う」「たたかう」「けんかする」「対立する」「口論する」のよう／あらそう、たたかう／という語彙的な意味をもつものにかぎられている。

(6) ＜対象＞をさしだす「～に対して」

述語動詞に態度をあらわす動詞や形容詞、または言語活動をあらわす動詞がくる。名詞部分は述語のあらわす態度がむけられる人やことがらなどをさしだすため、さまざまなタイプの名詞がくる。

(7) <基準>をさしだす「～にとって」

二格の名詞部分は人名詞(または組織をあらわす名詞)にかぎられる。述語は形容詞(または形容詞的な意味をもつ単語)である。

(8) <原因・手段・媒介>をさしだす「～によって」「～を通じて」「～を通して」

名詞部分には現象をあらわす名詞、または人の行為をあらわす名詞がくる。さらに、「～スルことによって」というように名詞句がくることがあり、この点でこのグループの後置詞は特徴的であるといえる。

(9) <資格>をさしだす「～として」

名詞部分も述語部分にも品詞や語彙的な意味のタイプによる制限がなく、さまざまなものがくる。また、名詞の格形式でおきかえることができない。この2つの点において、「～として」は他の後置詞にない特徴をもっている。

(10) <主体>をさしだす「～によって」

無生物主語の受動文にもちいられる。能動文にはあらわれない。

2. また、後置詞のうち、「～は」というかたちをとるばあいにはのみ異なる用法をもつものがあつた。('～としては」「～については」「～に関しては」「～によっては」「～にかけては」) この用法は連用形にのみあらわれるもので、連体形ではみられなかった。

3. 社会科教科書においてはどの後置詞もその用法の多くが使用されていた。また、社会科教科書における後置詞の出現数は4年生は89(約17%)、5年生は204(約39%)、6年生は226(約44%)となっており、高学年になると急にふえている。このことはおそらく学習内容と密接にかかわっていると思われるが、その点についてはこれからあきらかにしていきたい。

【参考文献】

奥田靖雄1962「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」

『日本語文法・連語論(資料編)』 むぎ書房

1967「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」

『日本語文法・連語論（資料編）』 むぎ書房

1968-72「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」

『日本語文法・連語論（資料編）』 むぎ書房

奥田靖雄（言語学研究会・構文論グループ）1989「なかどめ」

『ことばの科学2』 むぎ書房

小高 愛1994 「動詞派生の後置詞「よって」」

『横浜国大言語研究』第12号

1999 「動詞派生の後置詞「とって」」

『千葉大学留学生センター紀要』第5号

2000 「「むかう」と「むかって」—動詞から後置詞へ—」

『千葉大学留学生センター紀要』第6号

金子尚一1983 「日本語の後置詞」

『国文学 解釈と鑑賞』4月号 至文堂

グループ・ジャマシイ編著1998『日本語文型辞典』 くろしお出版

佐藤尚子1989 「現代日本語の後置詞の機能

—「～について」と「～に対して」を例にして—」

『横浜国大言語研究』第7号

白鳥智美2000 「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査

—社会科教科書の語彙—」

『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』

白鳥智美・玉井裕子2000『児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査

—小学校社会科教科書を対象として—』

横浜・児童生徒のための日本語教育研究会

鈴木重幸1972 『日本語文法・形態論』 むぎ書房

砂川有里子1987「複合助詞について」『日本語教育』62 日本語教育学会

永野 賢1952 「表現文法の問題—複合辞の認定について—」

『伝達論にもとづく日本語文法の研究』 東京堂出版

野村剛史1984 「～にとって／～において／～によって」

『日本語学』3-10 明治書院

西尾寅弥1972 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

松木正恵1990 「複合辞の認定基準・尺度選定の試み」

『早稲田大学日本語研究センター紀要』

まつもとひろたけ 1989 「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」

『言語の研究』 むぎ書房

宮島達夫1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

村田美穂子1997 『助辞「は」のすべて』 至文堂

森田良行1977 『基礎日本語1』 角川書店

森田良行・松木正恵

1989 『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法』 アルク

【用例出典】

有吉佐和子 『恍惚の人』 新潮文庫

井上 靖 『氷壁』 新潮文庫

井上 靖 『天平の薨』 新潮文庫

鎌田 慧 『ドキュメント 失業』 ちくま文庫

寺田 寅彦 『寺田寅彦随筆集』 岩波文庫

西村京太郎 『神話列車殺人事件』 角川文庫

新田 次郎 『八甲田山死の彷徨』 新潮文庫

宮本 輝 『花降る午後』 角川文庫

朝日新聞 東京本社版

CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』より

阿川 弘之 『山本五十六』

安部 公房 『砂の女』

石川 達三 『青春の蹉跌』

井上 靖 『あすなろ物語』

大岡 昇平 『野火』

開高 健 『パニック・裸の王様』

川端 康成 『雪国』

北 杜夫 『楡家の人びと』
新田 次郎 『孤高の人』
三浦 綾子 『塩狩峠』
吉行淳之介 『砂の上の植物群』

『CASTEL/J』（日本語教育支援システム研究会）データベースより

中根 千枝 『タテ社会の人間関係』
山田 雄一 『稟議と根回し』
米山 正信 『化学とんち問答』
井上昌次郎 『睡眠の不思議』
合山 究 『故事成語』
文 部 省 『我が国の文教政策』
経済企画庁 『平成5年版経済白書』
経済企画庁 『平成4年版国民生活白書』

【主な調査・執筆担当者】

1. はじめに 佐藤尚子
- 3-1. 「～によって」 小高 愛
- 3-2. 「～について」 小高 愛
- 3-3. 「～に対して」 白鳥智美
- 3-4. 「～にとって」 白鳥智美
- 3-5. 「～にかけて」 宮川和子
- 3-6. 「～にわたって」 宮川和子
- 3-7. 「～を通じて」 白鳥智美
- 3-8. 「～をめぐる」 遠藤真由美
- 3-9. 「～を通して」 白鳥智美
- 3-10. 「～をめざして、～にむけて」 小高 愛
- 3-11. 「～において」 遠藤真由美
- 3-12. 「～にむかって」 小高 愛
- 3-13. 「～に関して」 佐藤尚子

3-14. 「～として」 佐藤尚子

4. まとめ 小高 愛

なお、最終的なまとめは佐藤と小高がおこなった。